

# H23 年度霧多布沖合調査

## NPO法人エトピリカ基金



## 霧多布沖合調査

### 1) 目的

北海道東部に位置する浜中町霧多布周辺ではエトピリカやケイマフリといった希少海鳥の保護・調査活動が展開されているが、最も基本となる海上の鳥類相とその季節変化については不明な点が多い。そこで当基金では2010年4～9月に小型漁船による霧多布沿岸の海鳥・海獣調査を、岬からの定点調査と合わせて行なった。これらの調査により春から夏の、沿岸域における海鳥相やその特徴が明らかになった一方、沿岸域に偏った調査であったため外洋性の種が記録しづらい、また繁殖期前後の調査だったため希少種を含めた非繁殖期の分布は不明のままであり、調査範囲を時間的にも空間的にも拡大する必要性が課題として残った。そこで2011年度は、調査範囲を沖合35km程度にまで拡大し、非繁殖期にも調査を実施することによって、季節ごとの広域の海鳥相を把握できるよう努めた。

昨年度と同様の、沿岸域の海上調査と岬からの定点調査も合わせて実施したが、それらの結果や沖合調査との比較はIV章及びV章を参照いただきたい。

### 2) 調査方法

調査は2011年5～11月、2012年1～2月の各月に1回、計9回行なった。調査は漁船を備船して行ない、5～11月は「第八栄徳丸」（堀場伸也船長 4.9t；写真1）、1～2月は「第三十八伏見丸」（野崎誠船長 7.9t；写真2）にそれぞれ協力いただいた。記して謝意を表する。

調査地は北海道厚岸郡浜中町の海域で、基本的なルートは以下の通り；同町霧多布港を出港して浜中湾を東進、約5km沖合のホカケ岩を經由してそこから7km程度東の北緯43度05分、東経145度16分付近で南へ変針し、約30km先の北緯42度50分、東経145度19分付近で西へ変針。12～13km西方の北緯42度50分、東経145度10分付近で北へ変針し、霧多布岬東方海上を經由して霧多布港に戻る（図1）。上記の5時間半～6時間半のルートが基本となるが、月によってより手前側や沖合側のコースをとることもあった（図2）。これは主に海況や他の漁業との兼ね合い（網が設置されている等）によるものである。また、1月はルート、調査時間とも他の回と大きく異なっているが、これはタコ漁に同行しての調査だったため、漁優先の海域、時間設定になっているためである。

各月の調査日、時間、気象条件を表1に示した。調査時間は日長や海況、他の漁との兼ね合い等で月によって異なるが、結果としてほとんどの調査が午前中から午後の早い時間にかけて行なわれた。

調査は、船の舳先の左右に各1名以上の調査員を配置して行ない、それらの間に記録係が入り、調査員が口頭で伝える情報を野帳に記録した。港を出てから戻るまで、通常より

低速（10 ノット前後）で航行し、調査員は 10 倍前後の双眼鏡で目視調査を行なった。原則として片側約 200m（両側 400m）に出現する鳥類ならびに哺乳類について、発見時刻、種、数、行動（飛翔、海上、上陸等）、左右の別等を記録した。距離や角度等により種まで同定できない場合は、「ウミガラス sp.」や「ミズナギドリ類」等種より上位の分類群で記録した。また、岸壁から港の出入口までの漁港内はカモメ類やカラス類等、人間活動によって誘引された鳥が明らかに多いと考えられたため、種のみ記録し、個体数ほかは記録しなかった。出現した海鳥、海獣類は、可能な限り 400mm 望遠レンズを装着したデジタル一眼レフカメラ（Canon EOS7D）で写真撮影を行ない、識別や羽衣の調査に役立てられるように心がけた。また、出港から帰港まで、GPS（Garmin 社製 GPSmap 62SJ、同じく 60CS）で位置情報を取得した。

表 1 調査日ごとの時間及び観察条件等

年	2011							2012	
	5	6	7	8	9	10	11	1	2
月	5	6	7	8	9	10	11	1	2
日	24	13	27	20	20	5	18	18	23
時間	7:54-13:22	8:57-13:58	9:57-15:22	9:27-14:57	7:27-12:50	9:28-13:54	8:04-13:02	6:39-15:17	6:29-12:51
天気	曇り	曇り	曇り時々晴れ	曇り	曇り	晴れ	晴れのち曇り	晴れ	曇り
波	1.5m	1m	1m	1m	1.5mうねり	1.5m	1m	0.5m	1m
風	東2	0	0	0	0	西4	西2	0	南東1
視程	水平線	200m-水平線	水平線	100m-水平線	水平線	水平線	水平線	水平線	水平線
船	栄徳丸	伏見丸	伏見丸						

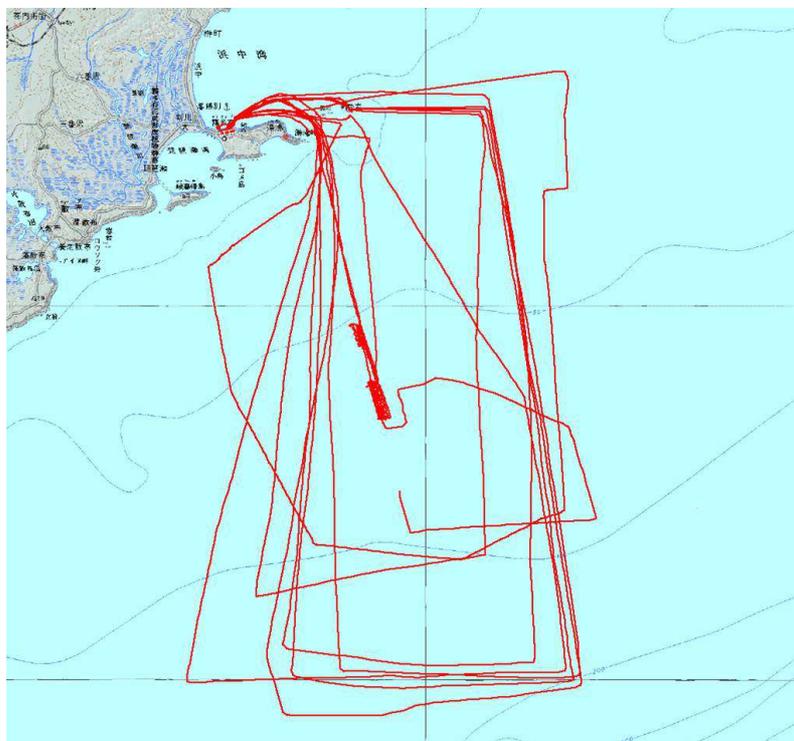


図 1 すべての調査ルート

### 3) 結果ならびに考察

#### 第1部 海鳥

##### (1) 出現した科ならびに種数

9回の調査で表2ならびに3に示したように、17科58種の鳥類と21の不明カテゴリ（「アビ sp.」、「ケイマフリ？」等）が記録された。不明カテゴリは観察条件が悪くて種の同定まで至らなかったものが大部分で、新たな種を含んでいる可能性はきわめて低い。17科58種の鳥類のうち、トビ、オオワシ、ハヤブサ、チュウシャクシギ、ヒバリ、タヒバリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ワタリガラスの9種は主に陸域に生息する種で、移動中や岩礁への止まり個体が船から観察されたものである。したがって、それらを除く11科49種が霧多布周辺の海鳥といえる。海鳥のうち2010年の海上調査で出現しなかったのは、アホウドリ、クロアシアホウドリ、ミナミオナガミズナギドリ、アカアシミズナギドリ、ハイイロウミツバメ、ホオジロガモ、ユリカモメ、セグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、コシジロアジサシ、ハシブトウミガラス、エトロフウミスズメ、コウミスズメの14種であった。これら14種のうち、アホウドリ類やミズナギドリ類等は調査範囲を沖合まで拡大したことによって、またエトロフウミスズメやコウミスズメ、カモメ類等は調査期間を秋冬まで延長したことによって記録可能になったと考えられ、霧多布の海の生物多様性を明らかにするための調査範囲の時・空間的拡大の必要性を支持するものといえる。

海鳥のうち科ごとの種数では、カモメ科とウミスズメ科がそれぞれ10種と最多で、カモ科の9種、ミズナギドリ科の6種がそれに続き、アビ、アホウドリの各科は3種、ウ、ヒレアシシギ、トウゾクカモメの各科は2種、カイツブリ、ウミツバメの各科は1種と少なめだった。

表2 調査日ごとの出現海鳥類の種及び科名（その1）

No.	科名	種名/月・日	5	6	7	8	9	10	11	1	2
			24	13	27	20	20	5	18	18	23
1	アビ	アビ	●						●		
2		オオハム	●						●		
3		シロエリオオハム	●	●	●	●		●	●		
4	カイツブリ	アカエリカイツブリ					●		●		●
5	アホウドリ	アホウドリ	●	●							
6		コアホウドリ	●	●	●	●	●	●	●		
7		クロアシアホウドリ	●	●	●	●	●				
8	ミズナギドリ	フルマカモメ	●	●	●	●		●	●		
9		オオミズナギドリ			●	●	●	●			
10		ミナミオナガミズナギドリ					●	●			
11		アカアシミズナギドリ	●		●	●	●				
12		ハイロミズナギドリ	●	●	●	●	●	●	●		
13		ハシボソミズナギドリ	●	●	●						
14	ウミツバメ	ハイロウミツバメ			●						
15	ウ	ウミウ	●	●	●	●	●	●	●		
16		ヒメウ	●		●	●	●	●	●	●	●
17	カモ	キンクロハジロ	●								
18		スズガモ							●	●	●
19		クロガモ	●				●	●	●	●	●
20		ビロードキンクロ	●						●	●	●
21		シノリガモ	●				●	●	●	●	●
22		コオリガモ							●	●	●
23		ホオジロガモ									●
24		ウミアイサ	●						●		●
25		カワアイサ			●						
26	タカ	トビ							●		
27		オオワシ								●	●
28	ハヤブサ	ハヤブサ									●
29	シギ	チュウシャクシギ	●								
30	ヒレアシシギ	ハイロヒレアシシギ	●		●	●	●				
31		アカエリヒレアシシギ	●	●	●	●	●				
32	トウゾクカモメ	トウゾクカモメ			●	●	●	●			
33		クロトウゾクカモメ				●	●	●			
34	カモメ	ユリカモメ					●		●		
35		セグロカモメ					●	●	●		
36		オオセグロカモメ	●	●	●	●	●	●	●	●	●
37		ワシカモメ						●	●	●	●
38		シロカモメ							●		●
39		カモメ							●		●
40		ウミネコ	●	●	●	●	●	●	●		
41		ミツユビカモメ	●					●	●		
42		アジサシ	●								
43		コシジロアジサシ				●					

表2 調査日ごとの出現海鳥類の種及び科名（その2）

No.	科名	種名/月・日	5	6	7	8	9	10	11	1	2
			24	13	27	20	20	5	18	18	23
44	ウミスズメ	ウミガラス	●	●	●	●			●	●	●
45		ハシブトウミガラス	●	●					●	●	●
46		ウミバト							●	●	●
47		ケイマフリ	●		●	●			●	●	●
48		ウミスズメ	●	●	●	●			●	●	
49		カンムリウミスズメ			●	●	●	●			
50		エトロフウミスズメ		●						●	●
51		コウミスズメ								●	●
52		ウトウ	●	●	●	●	●	●	●		
53		エトピリカ			●	●	●				
54		ヒバリ	ヒバリ	●							
55		セキレイ	タヒバリ						●		
56	カラス	ハシボソガラス						●			
57		ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	
58		ワタリガラス									●
59	アビ	アビsp.	●	●		●	●	●	●	●	
60		オオハム類		●	●						
61	アホウドリ	アホウドリ類					●				
62	ミズナギドリ	ミズナギドリ類	●	●	●	●	●	●	●		
63		黒色ミズナギドリ類					●				
64	ウ	ウspp.	●	●	●	●		●	●		
65	カモ	ビロードキンクロ?	●								
66		カモ類							●	●	
67	シギ	シギ類				●					
68	ヒレアシシギ	ヒレアシシギspp.			●	●	●				
69	トウゾクカモメ	トウゾクカモメ類			●		●	●			
70	カモメ	カモメ類							●		
71		大型カモメ類							●		
72		アジサシsp.				●					
73	ウミスズメ	ウミガラスspp.	●	●	●				●	●	●
74		ケイマフリ?								●	
75		ウミバトsp.								●	
76		ウトウ?	●								
77		ウミスズメ類				●			●		●
78		小型ウミスズメ類				●	●				
79	カラス	カラスsp.	●								

表3 調査日ごとの海鳥類の種別確認数（その1）

No.	科名	種名/月・日	5	6	7	8	9	10	11	1	2
			24	13	27	20	20	5	18	18	23
1	アビ	アビ	1						2		
2		オオハム	1						1		
3		シロエリオオハム	3	2	1	3		2	150		
4	カイツブリ	アカエリカイツブリ					1		5		5
5	アホウドリ	アホウドリ	1	1							
6		コアホウドリ	57	30	77	42	36	6	8		
7		クロアジアホウドリ	3	2	64	40	33				
8	ミズナギドリ	フルマカモメ	67	49	368	8		54	53		
9		オオミズナギドリ			1	86	297	620			
10		ミナミオナガミズナギドリ					9	1			
11		アカアシミズナギドリ	2		3	3	3				
12		ハイロミズナギドリ	4	4	249	253	1094	46	310		
13		ハシボソミズナギドリ	108	28	3						
14	ウミツバメ	ハイロウミツバメ			1						
15	ウ	ウミウ	25	19	28	55	18	10	101		
16		ヒメウ	80		57	18	48	23	92	41	84
17	カモ	キンクロハジロ	●								
18		スズガモ			4				●	●	●
19		クロガモ	1				2	3	46	179	718
20		ビロードキンクロ	6						55	60	126
21		シノリガモ	34				1	10	206	6	71
22		コオリガモ							20	21	41
23		ホオジロガモ									5
24		ウミアイサ	1						1		●
25		カワアイサ			●						
26	タカ	トビ						1			
27		オオワシ								●	3
28	ハヤブサ	ハヤブサ									1
29	シギ	チュウシャクシギ	9								
30	ヒレアシシギ	ハイロヒレアシシギ	119		161	348	14				
31		アカエリヒレアシシギ	16	29	9	31	140				
32	トウゾクカモメ	トウゾクカモメ			1	7	4	31			
33		クロトウゾクカモメ				1	2	1			
34	カモメ	ユリカモメ					1		1		
35		セグロカモメ					6	23	11		
36		オオセグロカモメ	105	20	51	57	106	131	109	30	75
37		ワシカモメ						●	3	1	1
38		シロカモメ							4		10
39		カモメ							12		2
40		ウミネコ	3	13	81	48	157	51	5		
41		ミツユビカモメ	1					73	207		
42		アジサシ	15								
43		コシジロアジサシ				3					

表3 調査日ごとの海鳥類の種別確認数（その2）

No.	科名	種名/月・日	5	6	7	8	9	10	11	1	2
			24	13	27	20	20	5	18	18	23
44	ウミスズメ	ウミガラス	2	1	1	1			32	54	13
45		ハシブトウミガラス	8	9					8	51	74
46		ウミバト							7	2	6
47		ケイマフリ	12		4	1			10	130	76
48		ウミスズメ	46	9	9	1			320	24	
49		カンムリウミスズメ			31	16	13	5			
50		エトロフウミスズメ		15						4	660
51		コウミスズメ								30	101
52		ウトウ	176	634	582	209	2314	188	585		
53		エトピリカ			24	3	1				
54	ヒバリ	ヒバリ	●								
55	セキレイ	タヒバリ						●			
56	カラス	ハシボソガラス						●			
57		ハシブトガラス	●	●	●	●	●	●	●	●	
58		ワタリガラス									11
59	アビ	アビsp.	13	3		1	4	1	39	3	1
60		オオハム類		2	20						
61	アホウドリ	アホウドリ類					1				
62	ミズナギドリ	ミズナギドリ類	29	13	703	205	71	1003	13		
63		黒色ミズナギドリ類					300				
64	ウ	Uspp.	1	5	5	10		140	275		
65	カモ	ビロードキンクロ?	4								
66		カモ類							1	1	
67	シギ	シギ類				61					
68	ヒレアシシギ	ヒレアシシギsp.			180	85	53				
69	トウゾクカモメ	トウゾクカモメ類			1		4	9			
70	カモメ	カモメ類							50		
71		大型カモメ類							22		
72		アジサシsp.				7					
73	ウミスズメ	ウミガラスsp.	4	8	1				1	81	13
74		ケイマフリ?								6	
75		ウミバトsp.								2	
76		ウトウ?	1								
77		ウミスズメ類				1			2		2
78		小型ウミスズメ類				4	3				
79	カラス	カラスsp.	1								

## (2) ウミスズメ科各種の確認状況

エトピリカやケイマフリを含むウミスズメ科鳥類は、寒流域の海鳥群集の中でも重要な位置を示すため、種ごとの出現状況について以下記す。

### ①ウミガラス

本種は1983年まで根室半島沖のモユルリ島で繁殖していたが、北海道東部の繁殖個体はその後消失した。隣接した歯舞諸島では現在も繁殖していると思われ、2010年8月には根室の落石沖で親子が観察されている。

本調査では9月と10月を除くすべての月で記録されたが、5~8月は1~2羽と少なく、ごく少数が滞在しているだけと考えられた。11月以降確認数は増加し、同月には32羽、1月には54羽が記録された。これは千島列島等北海道より北で繁殖し、越冬のために北海道近海に飛来する個体群の存在を示唆している。1月調査では、ハシブトウミガラスか本種だが条件が悪くて識別できない「ウミガラス sp.」も81羽出現しており、かなりの数が飛来しているものと思われる。2月には近縁種のハシブトウミガラスが前月より増加したのに対し、本種は13羽と激減した。時期的にもっと南の海域まで移動するのか、沿岸氷や流氷を避け当海域から離れたのかは不明である。

### ②ハシブトウミガラス

千島列島やベーリング海等北海道より北で繁殖する種である。

5~6月と11~2月に出現し、夏から秋には確認できなかった。本種の春の渡りは遅く、5月頃でも海上で多数見られることがあり、一部の若鳥はそのまま夏まで残留する。5~6月に記録されたのはおそらくそうした個体であろう。昨年同時期の海上調査で記録できなかったのは、本種がウミガラスに比べてやや沖合性が強いためと考えられる。秋冬は、渡来初期の11月には8羽と少なかったが、1、2月にはそれぞれ51、74羽と多数が記録された。同定された範囲では、1月はウミガラスとほぼ同数だったが、2月には本種の方がはるかに多かった。11月の少なさと2月の多さを考えると、ウミガラスより飛来のタイミングが遅いのかもかもしれない。ウミガラスとは分布や食性の違いが知られているが、当海域ではしばしば両種が一緒に飛んでいるのが観察された。

### ③ウミバト

千島列島（中部以北）やアリューシャン列島で繁殖し、北海道には主に冬渡来する。

本調査では11~2月に出現し、11月7羽、1月2羽、2月6羽がそれぞれ記録された。これらの結果から、数は少ないものの本種は冬鳥として定期的に当海域へ飛来している可能性が窺える。これまで記録が少なかったのは、近縁種のケイマフリとの識別の難しさにその一因があろう。本調査でも当初、11月は2羽、1月は0という結果だったが、画像をチェックしたところ少なくとも上記数のいることが判明した。翼の白斑の大きい、わかり

やすい個体が単独で出現すれば識別容易な本種も、翼の白斑がほとんど目立たない個体やケイマフリが次から次に出現する中で現れると発見は困難になる。そのような状況では多くの個体画像を撮影しておくことの有用性を、本種に関する結果は支持している。なお、撮影できた11月の7羽のうち4羽、2月の4羽（2羽は撮影できず）のうち2羽は翼の白斑は不明瞭で、雨覆の羽先に数列の白線が出る程度であった。本調査における出現の大部分は、霧多布岬からホカケ岩にかけての沿岸域（特に後者周辺）で、沿岸性の種と思われる。

本種は夏期に道東近海に留まる個体もあり、2010年調査でも1羽が海上や岬の調査で観察された。2011年度は沖合調査では出現しなかったが、沿岸や岬の調査ではやはり1羽程度が夏期に観察されている。

#### ④ケイマフリ

6、9、10月を除き出現した。2月以外の出現は、大半がホカケ岩周辺の沿岸域であり、沿岸との強い結び付きを示唆している。2月はやや沖合を含む広範囲で観察されたが、これは当時沿岸域が低温による沿岸氷の広がり、利用可能な状態に無い日が多くあったことに起因するものかもしれない。

夏の間最大の5月の12羽で、7、8月は1~4羽と非常に少なかった。当海域における本種の主要な繁殖地は小島であり、2010年の沿岸調査でも繁殖期の出現は小島から霧多布島南岸の沿岸域に集中していた。本調査での出現の少なさは、同時期にそれらの沿岸にいたことの裏返しとも考えられる（沿岸域における本種の観察記録については、本報告書の他の項を参照）。繁殖期後の9月以降に見られなくなる傾向は、今年の沿岸調査ならびに近隣地域での観察結果とも一致する。沿岸で観察されなくなることから、沖合に出ている可能性も考えられていたが、本調査の結果はそれを否定するもので、同時期にケイマフリがどこに分布しているのかは依然として謎であり、今後の興味深い課題でもある。

11月より再び観察され始め、1月には130羽と極大に達した。このことはオホーツク海や千島列島等、北方からの個体群が加わる可能性を強く示唆している。世界的にも極東にしか分布しない本種が、一回の調査で100羽以上記録されるということは、当海域が越冬地として重要な意味を持っている可能性がある。冬期の100羽以上の群れは、根室半島周辺や十勝沿岸の海上でも観察されており、それらを合わせると根室半島から襟裳岬に至る道東太平洋海上では相当数が越冬していて、本種にとって非常に重要な海域である可能性もある。概数であっても越冬の現状を明らかにするための調査が、今後早急に必要である。2月の減少は沿岸氷や流氷による追い出しが影響している可能性がある。本種は換羽のタイミングに著しい個体差があり、2月調査ではほぼ完全な夏羽や腹が斑状に黒い個体が観察された一方で、まだ白黒のはっきりと分かれた冬羽も見られた。

## ⑤ウミスズメ

9、10、2月を除いて出現した。5月は46羽と比較的多く、まだ春の渡りが続いていたものと思われる。6～8月はいずれも10羽以下と少なかった。ただ、7月調査ではまだ綿羽に包まれた雛2羽を伴った成鳥2羽の家族群が出現した(写真33-34)。北海道東部における本種の繁殖は、1987年に根室半島沖のハボマイモシリ島で巣卵が発見された事例があるだけで、現状は謎に包まれている。雛は孵化後1、2日で巣を出て海上で子育てされる。今回まだ幼い雛が観察されたということは、そう遠くない範囲に繁殖地があることを示唆するものである。来年度以降も雛の出現する時期に集中的に調査を行ない、最終的には営巣地の特定ならびに保全を目指す取り組みが必要と考える。

9、10月に沿岸、沖合とも一度姿を消す傾向はケイマフリと共通していて興味深い。

11月は秋の渡りピーク期と一致し、300羽以上が観察された。北日本太平洋側における本種の主要な越冬地は、東北地方から北関東にかけての海上であり、北海道では厳冬期には沿岸部で少数が見られるだけになる。本調査における1月の結果もそれを支持し、出現はいずれも沿岸であった。2月には沿岸でも観察されなかったが、これは低温による沿岸氷の広がりや流氷の活発な南下が関係していたかもしれない。

## ⑥カムリウミスズメ

寒流系のウミスズメ類の中では例外的に、伊豆諸島や九州の離島等黒潮域の島嶼で繁殖する。

7～10月に連続して出現し、5(10月)～31(7月)羽が観察された。昨年の沿岸調査での出現や、近隣海域での観察結果から、夏から秋に少数が定期的に飛来することが予想されていたが、本調査の結果は予想をはるかに上回る規模でカムリウミスズメが道東近海へ来遊している可能性を示唆した。特に7月の31羽という数は、これまで北海道近海では観察されたことのない数である。近隣の他の海域でも同様の数が飛来しているならば、同時期の北海道太平洋沿岸には数百、あるいは1000を超えるカムリウミスズメが飛来している可能性もあり、総個体数が5000～10000羽程度とされる本種の夏期の生息海域として世界的な価値を持ちうるだろう。今後は霧多布海域でのモニタリングを続けて行くと同時に、近隣の他地域でも飛来状況や数に関する調査を進め、北海道近海での現状を明らかにすることが必要である。また、羽毛や死体が手に入る機会があれば、繁殖地を明らかにするための遺伝学的解析も必要であろう。

当海域における出現(7月)と消失(10月)のタイミングは、近隣の十勝沖や釧路沖、勇払沖等での観察結果とも一致しており、7～10月が北海道近海への飛来時期と考えてよい。

7～10月に観察された27個の群れサイズは1～4羽で、3羽が最も多く(10群、37.0%)、2羽(9群、33.3%)がそれに続き、これらで全体の7割以上を占めた。1羽は5群(18.5%)、4羽は3群(11.1%)であった。2～4羽の群れが全体の8割以上となったが、これらの個体間の関係は不明である。

次いで羽衣について簡単に述べる。7月には31羽すべてが目先の白い、いわゆる非生殖羽であった。後頭の白い冠羽は30羽で太く顕著で、細く不明瞭な個体が1羽いた。8月には撮影できた14羽のうち、13羽は目先が白かったが、同部分がぼんやりと黒くなっている個体を1羽確認した。白い冠羽は8個体で太く明瞭だったが、6羽では細いまたは不明瞭であった。目先の黒い個体の冠羽は太く、明瞭だった。9月は撮影できた13個体のうち、目先が白いのは8羽で、はっきりと黒いものが2羽、ぼんやりと黒いものが3羽であった。白い冠羽が太くて明瞭なのは9羽で、4羽では不明瞭または確認できなかった。目先に黒みを帯びる個体の冠羽は、いずれも太く明瞭であった。10月は撮影できたのは2個体だけだったが、1羽は目先も真っ黒な生殖羽で、もう1羽の目先は白かった。白い冠羽は、漁個体とも明瞭だった。以上から、7月に道東に現れる時期にはすべての個体が日非生殖羽で、早い個体では8月下旬から顔の黒色部に生殖羽の特徴が現れ始め、9月、10月にかけてその割合は増えてゆくようであることがわかる。後頭の白い冠羽の太さ、明瞭さについては、言及できる段階にはないが、目先に生殖羽の特徴の現れた個体の冠羽がいずれも明瞭であったこと、また冠羽が不明瞭な個体の上面はやや黒色の強い傾向のあったこと等を考えると、冠羽の不明瞭な個体は若鳥なのかもしれず、今後の精査によって明らかになることが期待される。

#### ⑦エトロフウミスズメ

中部以北の千島列島やベーリング海等で繁殖し、冬期北日本の海上に渡来する種。

1月調査では4羽が観察されたのみだったが、2月には沖合で数～数十羽の群れがいくつも出現し、合計660羽が確認され、ウミスズメ類の最優占種であった。本種は流氷の前縁付近に多く分布する傾向があり、2月調査時は流氷が納沙布岬を回り込んで太平洋側にも流れ込んでいたことから、氷に押し出される形で多数が飛来していたと考えられる。冬の記録とは別に、6月にも15羽が出現した。本種の産卵期は、分布域の南側では5月後半から、北側では6月後半にまで及ぶ。観察された個体が非繁殖鳥なのか、分布域の北側で遅く繁殖する個体なのかは不明だが、オレンジ赤色の嘴が鮮やかな成鳥夏羽であった。本種は通常4月頃までには渡去するが、5月後半から6月前半に太平洋やオホーツク海で少数が観察されることがある。

2月調査での53件の出現の群れサイズは、1～70羽の範囲で、平均は12.5羽であった。羽衣は冬羽タイプばかりであったが、①嘴のオレンジ色みがやや出て目後方の白線は長く、また上面の黒は艶がある個体と、②嘴の色は鈍く眼後方の白線は短く、上面の黒は灰色がかかる個体とがいた。前者が成鳥冬羽（もしかしたら夏羽へ換羽中）、後者が若鳥なのかもしれない。

#### ⑧コウミスズメ

ベーリング海やオホーツク海北部で繁殖し、冬期北日本の海上に渡来する種である。

1、2月にのみ記録され、数は30～101羽で、2月にはエトロフウミスズメに次いで卓越するウミスズメ類であった。本種もエトロフウミスズメと同様流氷の前縁付近に多い傾向があり、2月の卓越は流氷の影響と考えられる。ただ、十勝沖等での観察から本種は、12月後半には既に群れが到着しており、当海域でも同様の可能性が高い。1月の出現が少なかったのは、タコ漁に同行しての調査だったため調査範囲が限られたこと、上記の方法でも大型で遠くの個体も発見・識別が可能なウミガラス類やケイマフリ等とは異なり、小さくて海面低く飛ぶ本種は発見が困難なこと等が理由かもしれない。

2月調査での30件の出現の群れサイズは、1～10羽の範囲で、平均は3.4羽であった。エトロフウミスズメと比べると、個々の群れのサイズは小さい傾向がある。

観察された羽衣は基本的に冬羽タイプだが、2月調査では腹にまだら状に暗色部が出る、目の前後方に白色の羽毛が混じる等、夏羽への換羽の始まったと思われる個体も見られた。

本種やエトロフウミスズメ等の越冬期に飛来するウミスズメ類の洋上での生態は、ほとんど調査されてこなかった。当海域では流氷期には多数飛来することが今年の調査から明らかになったので、今後洋上での分布やその季節変化、行動、群れサイズ、羽衣等の知見が蓄積されることが期待される。

## ⑨ウトウ

北海道周辺の離島で繁殖するが、浜中町内に繁殖地はなく、根室市のユルリ島、モユルリ島、厚岸町大黒島等が隣接した繁殖地となっている。

本調査では5～11月に確認され、1、2月には出現しなかった。北海道東部では本種は夏鳥であり、3月中旬に渡来し、11月末までに渡去する。本調査の結果もそれに一致するものである。

数は176羽(5月)から2314羽(9月)までばらつきが大きく、これは2010年の沿岸調査でも同様であった。これは、当海域がウトウにとって採餌域であり、餌資源の分布等に応じて飛来数の多寡が左右されるためと考えられる。最多数が記録された9月には、同じく魚食性の強いハイイロミズナギドリも1094羽の期間最多数を記録していることから、餌となる魚群が当海域に来遊していた可能性がある。

7月、8月調査時には少数の餌(サンマ?)くわえ個体が観察された。これらは繁殖地の雛へ給餌するためのものであり、どこかの繁殖地から飛来したと考えられる。

## ⑩エトピリカ

7～9月に出現した。8、9月はそれぞれ3、1羽だったが、7月には24羽が確認された。特徴的だったのはすべて1～2歳の若鳥であり、成鳥の確認はなかった点である。また、いずれも沖合での出現であり、霧多布島や小島周辺沿岸域での出現は皆無であった。夏の霧多布沖には多くのエトピリカ若鳥が飛来していることを明らかにできたのは、本調査の大きな成果の一つといえる。これらの若鳥は、その数から考えて道東で前年以前に巣立った

ものだけでなく、千島列島等で生まれた個体も含まれていると考えられる。近隣海域での観察から、こうした若鳥は道東海上に広く渡来しており、総数はかなりになると予想される。これらが霧多布をはじめ道東のコロニーに定着すれば、繁殖個体数の回復も期待できるが、そうはなっていないのが現状である。道東広域での飛来状況の把握と同時に、それらの個体の沿岸や繁殖地周辺への飛来を阻害している要因を明らかにし、軽減するための取り組みも必要と思われる。

7～9月の26件の出現のうち、7月の2羽2件を除くとすべて単独での出現であり、本種の若鳥は外洋域に単独で分布する傾向があると思われる。10月以降は出現しなかったが、北海道東部では少なくとも12月までは近海で観察されることがあり、当海域でも出現可能性がある。厳冬期の本種の分布はよくわかっておらず、本調査でまったく確認できなかったことから更に沖合にいるか、南下する可能性もあろう。

本種の若鳥は、成鳥夏羽から想起されるような派手な嘴や白い顔といった特徴は持たず、陸上からはもちろん、ともすれば海上調査においてもウトウと混同されかねない。本調査において多数個体の若鳥の画像を得ることができたので、今後それらを用いて海鳥の調査・観察を行なっている者や漁業関係者等に注意を喚起してゆくことも、本種の広域分布を把握する上では必要かもしれない。

### (3) ウミスズメ科以外の各科の確認状況

#### ①アビ科

アビ、オオハム、シロエリオオハムの3種が確認された。種の同定まで至らなかったものも含めると、すべての調査で観察されたが、夏期と厳冬期には数は少なく、春秋の渡り時期に多かった。アビとオオハムは春と秋に少数が観察されたのみで、種まで同定されたアビ類の大部分はシロエリオオハムだった。11月には150羽がカウントされ、これはちょうど秋の渡り時期と重なったためと考えられる。春の渡り時期には秋のような明瞭な増加は認められなかったが、これはアビ類の渡りのピークがおそらく数日～1週間程度の短い期間に集中するため、本調査のタイミングと合わなかったためであろう。2010年の岬調査では5月にそのような「ピーク」が当たり、日に5000羽を優に超えるシロエリオオハムをはじめとするアビ類が霧多布岬沖を渡って行くのが観察された。

#### ②カイツブリ科

アカエリカイツブリが9、11、2月に記録され、数は1～5羽といずれも少なかった。本種は道東、道北の湖沼で繁殖するもののほかに、北方から渡来したと思われる鳥も加わり、冬には沿岸域で普通に観察される。本種を含むカイツブリ類は沿岸性が強いいため、生息状況の把握には、本調査よりむしろ沿岸調査や陸上からの定点調査が適していると考えられる。

### ③アホウドリ科

アホウドリ、コアホウドリ、クロアシアホウドリの 3 種が確認された。いずれの種類も沖合で出現し、ごく沿岸域には出現しなかった。

アホウドリは 5 月と 6 月に 1 羽が観察された。いずれも体に褐色部の多い若鳥であるが、個体は別で、6 月個体の方が顔や体下面の白色部が多く、年齢が高いと思われた。どちらの個体も脚が羽毛に隠れていて足環の有無を確認できなかったため、出生地に関する考察はできないが、季節的にも鳥島や尖閣諸島の繁殖地で秋から春を過ごした個体がベーリング海等北洋へ向かう途中の飛来と思われる。本調査では初夏にのみ観察されたが、道東では 8 月や 11 月にも記録があり、厳冬期を除き出現の可能性がある。

コアホウドリは 5~11 月、クロアシアホウドリは 5~9 月に出現した。5、6 月はコアホウドリに比べてクロアシアホウドリはその 1 割以下と著しく少なかったものの、7 月以降 9 月まではクロアシアホウドリがやや少ない程度で両者が並存した。これは、クロアシアホウドリがコアホウドリよりやや高い水温の海域を好む傾向を反映したものである。秋期にクロアシアホウドリが、コアホウドリより早く当海域から消失したのも、そのためであろう。

### ④ミズナギドリ科

フルマカモメ、オオミズナギドリ、ミナミオナガミズナギドリ、アカアシミズナギドリ、ハイイロミズナギドリ、ハシボソミズナギドリの 6 種が記録された。フルマカモメは北太平洋の寒帯、亜寒帯域、オオミズナギドリは日本近海の温帯域、それ以外の 4 種は南半球で繁殖する。

フルマカモメは 9 月を除く 5~11 月に観察され、厳冬期には出現しなかった。最多は 7 月の 368 羽、最小は 8 月の 8 羽で、それ以外の月は 50~70 羽程度だった。千島列島やオホーツク海等で繁殖する本種の、海上における観察数がなぜ 7 月に最大になるのかは不明であるが、近隣の太平洋海上や根室海峡でも 6~7 月に個体数が増大し、その後秋の渡り前に一度減少する傾向を示す。非繁殖鳥であるか、繁殖地から採餌のため飛来するかのいずれと思われる。本調査で記録されたフルマカモメの大部分は暗色型であったが、5 月に 2 羽、7 月に 3 羽の白色型が出現し、フルマカモメ全体に占める割合はそれぞれ 3.0、0.8%であった。

オオミズナギドリは 7~10 月に記録され、数は 7 月の 1 羽から 10 月の 620 羽まで季節の進行とともに増加した。本種は、道内では日本海側の渡島大島で繁殖するが非常に少数で、道東太平洋へ飛来するものは本州沿岸や伊豆諸島の繁殖地からと思われる。2010 年沿岸調査の報告書では、これまで記録の少なかった本種が多数観察された理由として夏期の高い海面水温を挙げた。しかし、2010 年 8 月下旬の道東太平洋の海水温は前年比 $-2^{\circ}\text{C}$ で例年並みだったにも関わらず、本種は多数観察された。沖合では海水温に関わらず、季節的に飛来しているのかもしれない。

ミナミオナガミズナギドリは9月に9羽、10月に1羽が観察された。従来は日本近海では迷鳥とされていたが、ニュージーランド近海での繁殖後は太平洋に広く分散し、初夏から秋にかけて北太平洋亜寒帯にまで達する。北海道近海でも近年は晩夏から秋にかけての観察記録が相次いでおり、本調査における出現もその傾向と一致する。単独で飛んでいることもあったが、しばしばオオミズナギドリやハイイロミズナギドリの群中に見られた。

アカアシミズナギドリは6月を除く5~9月に出現したが、2~3羽と数は少なかった。根室海峡では8月末から9月にかけて、日本海、オホーツク海経由で入って来たと思われる本種の群れが見られるが、太平洋側の当海域までは達しないようである。日本海を北上する群れとは別に、春先に本州東岸を北上する群れもあるが、当海域含め道東太平洋では観察されていない。

ハイイロミズナギドリは5~11月に出現し、5、6月は各4羽と非常に少なかった。7月以降確認数は増加し、46羽の10月を除き100羽以上出現した。最大は9月の1094羽であった。本種とハシボソミズナギドリは識別が難しく、本調査においても条件次第では「ミズナギドリ類」あるいは「黒色ミズナギドリ類」とせざるを得ない場合も多くあった。ただ、それらを差し引いてもハイイロミズナギドリの渡りはハシボソミズナギドリのそれより遅めで、特にハシボソミズナギドリが概ね北上した秋期にも当海域に多数が滞在しているのが特徴といえる。

ハシボソミズナギドリは5~7月に記録され、5月には100羽以上出現したが、以降は6月28羽、7月3羽と非常に少なかった。2010年の沿岸調査では4月下旬に沖合を無数の本種が渡っているのが観察されており、近隣地域での観察からも4月下旬から5月上旬にかけて最初のピークがあると思われる。本調査で少なかったのは、第1回の5月下旬には渡りのピークを過ぎ、主群は既に根室海峡や北方四島方面に到達していたためと考えられる。道東海域ではその後6月下旬から7月上旬にかけて、幼鳥の渡りと思われる第2のピークがある。本調査ではそれも記録できなかったが、沿岸調査では7月9日に1121羽が確認されている。

#### ⑤ウミツバメ科

ハイイロウミツバメが1羽、7月に観察された。本種は千島列島等北海道より北で繁殖するが、フルマカモメ同様7月や秋期によく観察される。当海域の地理的条件からはもっと観察されても良さそうだが、出現は上記の1羽のみであった。

2010年の沿岸調査で、浜中町内に繁殖地があるにも関わらず出現しなかったコシジロウミツバメは、本調査においても出現しなかった。本調査の範囲よりも更に沖合にいるのか、特定の、未調査の場所に集中しているのかわからないが、ウミツバメ類の洋上分布は今後の課題の一つである。

## ⑥ウ科

ウミウ、ヒメウの2種が記録された。

ウミウは5～11月に出現し、厳冬期には観察されなかった。渡り個体や黒岩への止まり個体が多数観察された11月（101羽）以外は10～55羽と、霧多布岬や小島で繁殖している割に確認数は少なかった。これは、ウミウの採餌域が主として沿岸に偏っているためと思われる。一例として、7月に本調査で確認されたウミウは28羽だったが、2010年7月の沿岸調査では205羽が記録されている。

ヒメウは6月を除くすべての月で記録された。数は18（8月）～92（11月）羽で、総じて春や秋冬に多い傾向があった。夏の間は専らホカケ岩周辺で越夏している若鳥ばかりなのに対し、秋冬には成鳥も加わり海上で広く見られるようになるためであろう。

## ⑦カモ科

キンクロハジロ、スズガモ、クロガモ、ビロードキンクロ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カワアイサの9種が記録された。キンクロハジロ、カワアイサは淡水や内湾を好む種で、漁港内でのみ観察された。スズガモも内湾性の種で、7月に海上を飛ぶ4羽が観察されたほかは、すべて漁港内での出現だった。それ以外の海ガモ類は5月と9月以降の秋冬にのみ観察され、夏期には出現しなかった。これらの中でもホオジロガモが少なかったのは、本種も外洋より内湾や岸近くの海上を好むためと思われる。ウミアイサが少なかった理由は不明である。クロガモ、ビロードキンクロ、シノリガモ、コオリガモは11月以降を中心にまとまった数が確認された。特に多いのはクロガモで、2月には718羽が記録された。これら海ガモ類の大部分は、霧多布港からホカケ岩や霧多布岬にかけての浜中湾内に出現した。貝類等の水生無脊椎動物を好んで食べる海ガモ類にとって、水深が浅く、風浪の影響も少ない浜中湾は採餌、休息の両面から好適な生息地と考えられる。

## ⑧タカ科

トビとオオワシの2種が出現した。トビは11月に浜中湾の海上を飛ぶ1羽が観察された。オオワシは厳冬期に漁港で観察されたほか、2月にはホカケ岩、黒岩への止まり個体（各1羽）や海上を飛翔する個体が観察された。これらはいずれも成鳥であった。沖で観察されたのは、漁で投棄される魚か、海ガモ類等の鳥を狙ってのことであろう。

## ⑨ハヤブサ科

ハヤブサ1羽が2月に海上を飛翔するのが観察された。エトロフウミスズメやコウミスズメの小群が頻出するくらいの沖合であり、これらのウミスズメ類を狩るために飛んで来た可能性がある。

#### ⑩シギ科

チュウシャクシギ 9羽が、5月に海上を厚岸方から根室方向へ渡るのが観察された。本種は群れで海上を渡り、2010年5月には岬定点調査において同様のコースを渡る48羽が記録されている。

#### ⑪ヒレアシシギ科

ハイロヒレアシシギ、アカエリヒレアシシギの2種が記録された。前者は6月を除く5～9月、後者は5～9月の毎月出現した。5、7、8月にはハイロヒレアシシギの方が多く、119～348羽だったのに対し、アカエリヒレアシシギは9～31羽だった。9月にはハイロヒレアシシギが14羽と少なく、アカエリヒレアシシギが140羽と前月までの傾向と逆転した。遠くの飛翔や波間に浮き沈みする個体を「ヒレアシシギ sp.」とせざるを得ない場合も多かったが、それらを考慮しても当海域へはかなりの数のハイロヒレアシシギが飛来していることが窺える。8月の沿岸調査ではその数は1000羽を超えた（後述）。時期的にハイロヒレアシシギの方が多い傾向は、今年の沿岸調査でも見られており、陸上から見ているとヒレアシシギ類の大部分がアカエリであるような印象を抱くが、沖合を含む海上では必ずしもそうでないことが示された。

#### ⑫トウゾクカモメ科

トウゾクカモメ、クロトウゾクカモメの2種が出現した。前者は7～10月、後者は8～10月に記録された。いずれも秋の渡り中と思われる。10月のトウゾクカモメ31羽を除き、数は1～7羽と少なかった。ただし、種が同定できなかったものも含めると数はもう少し多くなり、また6月の観察例も1羽あった。周辺海域での観察から8～10月にはもう少し渡来していると思われるが、カモメ類やアジサシの大きな群れに追従して動く性質があるため、それらが記録されなかったことも本調査でトウゾクカモメ類が少なかった一因であろう。また、春の渡りも5月下旬から6月上旬にかけて、陸上から観察されることもあるが、本調査では確認できなかった。

#### ⑬カモメ科

ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、ミツユビカモメ、アジサシ、コシジロアジサシの10種が記録され、ウミスズメ科と並んで最も種数の多い科であった。

カモメ類の中で唯一通年出現したオオセグロカモメは、月によって20～131羽と数は変動し、明瞭な傾向は認められなかったものの、繁殖期の6～8月はやや少なかった。同時期には営巣地周辺の沿岸や陸上で活動する時間が増えるのかもしれない。当海域周辺でも霧多布岬や小島で繁殖している。ウミネコは5～11月を通じて出現し、厳冬期には姿を消した。道東では本種は夏鳥で、12～2月には見られなくなるので本調査の結果はそれに一致す

る。5、6月はそれぞれ3、13羽と非常に少数であったが7月以降確認数は増加し、9月に157羽と最大を記録した。本種は繁殖の終わる7月頃より、本州で繁殖したものも含め多数個体が道内の海岸・海上を漂行しており、本調査における増加もそれを反映したものと思われる。オオセグロカモメ、ウミネコ以外の種は春と秋冬、主に後者に出現したが、外洋性のミツユビカモメを除き、その数は総じて少なかった。ユリカモメ、セグロカモメは道東では主に旅鳥であり、本調査でも9～11月にのみ記録された。ワシカモメ、シロカモメ、カモメは冬鳥で、厳冬期にも記録された。ミツユビカモメも大部分は旅鳥で、主要な越冬地は本州北部～中部の太平洋上である。10、11月には多数が記録されたが、5月には1羽のみだった。5月調査時には既に春の渡りは終盤に向かっていたと考えられる。

アジサシは5月に15羽が記録されたのみだが、8月の「アジサシ sp.」は本種を含んでいる可能性が高く、春と秋に当海域を通過する種と考えられる。コシジロアジサシは、8月に成鳥3羽が記録された。2羽と1羽の出現で、前者は漂流している流木への止まり、後者は飛翔であった。本種は日本では迷鳥とされ、繁殖地以外の分布もよくわかっていないが、道東では2010年には厚岸、根室、2011年には浦幌の海上で、いずれも8月下旬に観察されている。本調査での出現も8月下旬であり、同時期には道東沖を定期的に通過している可能性があり、今後の解明が期待される。

#### ⑭ヒバリ科

ヒバリが5月に港内で観察された。港内の草地等で繁殖するものが囀っていたのだと思われる。

#### ⑮セキレイ科

タヒバリが10月に港内で確認された。9～10月には旅鳥として多数が通過する種で、港内の空き地等で休んでいたか、上空を通過したものであろう。

#### ⑯カラス科

ハシボソガラス、ハシブトガラス、ワタリガラスの3種が記録された。ハシブトガラスは毎月、ハシボソガラスは10月にのみ港内で記録された。ハシブトガラスはカモメ類とともに、漁港内で投棄された魚介類や生ごみを狙う常連である。ハシボソガラスは主に原野や農耕地で採餌する種だが、餌を求めて港に飛来したものであろう。ワタリガラスは2月に、11羽が霧多布岬の展望台上空で旋回・上昇し、時に個体間での遊びと思われる行動を示しながら、浜中湾の海上を北東方向へ飛去した。数や行動から渡りの途中であった可能性がある。

## 第2部 海獣

本年度の調査では、5科8種の海獣類ならびに3つの不明カテゴリ-が確認された(表4)。2010年度の4科4種と比べて大幅に増加したが、これは調査範囲を沖合まで拡大したこと、調査時期を長く取ったことによるものと思われる。海獣類は個体数の少ないものが多く、短期間の調査では成果は上がりにくい、調査の継続によって更に多くの種や霧多布近海における生息状況が確認されることが期待される。不明カテゴリ-を除く各種の確認状況を以下に記す。

### ①キタオットセイ

6月に4頭、7月に3頭がいずれも海上で観察され、6月の2頭の1群を除きすべて単独での出現であった。同時期は本種の繁殖期に当たり、繁殖地は中部千島やコマンドル諸島、サハリン沖等北海道より北であるが、本調査において観察された個体はいずれも小さく、性成熟前の若齢獣が滞留しているものと考えられる。今年度の調査で確認されたのは少数であったが、回遊移動期等にはより多く来遊している可能性もあり、海域によっては漁業被害や漁具・漂流物等への絡まりといった人間との軋轢が問題となっているので、当海域への来遊状況も今後明らかにしてゆく必要がある。

### ②ゼニガタアザラシ

5、7、8、10月に6~25頭が確認され、7月に沖合で観察された1頭を除き、すべてホカケ岩への上陸個体や同周辺の遊泳個体であった。沿岸性の強い本種は、浜中湾周辺では周年観察され、観察されなかった時は、波や潮位の影響でホカケ岩がアザラシの上陸に適さない状態であったためと考えられる。また、秋から冬にかけては、ホカケ岩より浜中湾の沿岸部にある上陸場により多くの個体が集まるため、冬期の不在はそのためかもしれない。今年度の調査で用いた船は、昨年度より大型だったためアザラシに警戒されやすく、7月の調査では約300mの距離で集団降海した。そのように大型の船は警戒されやすい、調査時間帯がアザラシの上陸する干潮と必ずしも一致しないため確認数にばらつきがあるといった欠点はあるが、普段接近できない沖合の上陸場であるホカケ岩ゆえに、本調査のような海鳥調査に便乗した情報収集も重要である。上陸個体はほぼすべて写真撮影できたので、今後「ゼニガタアザラシ個体識別データベース」に今年度の写真も登録し、過去の出現履歴や近隣上陸場との移動・交流の有無等について精査を行なう予定である。

### ③ミンククジラ

9月に2群2頭が観察された。本種は釧路沖では捕獲調査が行なわれており、2011年には4月25日~6月10日には35群41頭、9月9日~10月30日には144群150頭が、釧路港から半径50マイルの海域で目視されている(水産庁発表)。当海域のこの範囲内であり、確認された9月には多くのミンククジラが来遊していたと考えられ、調査で確認され

たのはその一部であろう。

なお、1頭はシャチの小群のすぐ近くに浮上するのが観察されており、シャチがいくつかのグループに分かれて広範囲に散らばっていたことを考えると、シャチによる本種のハンティングの最中だった可能性がある。南極海ではシャチの群れの中に1頭の本種がいるのが観察されており、「シャチの弁当持ち」と言われていて、その後の捕食も確認されている。

#### ④ザトウクジラ

9月に1頭が沖合でブリーチングするのが観察された。当海域における本種の現状は不明だが、2011年7月には浜中町渡散布に死体漂着があり（ストランディングネットワーク北海道HP）、根室沖や根室海峡でも観察記録があることから春～秋の高緯度海域への索餌回遊期やその移動中に出現している可能性がある。本種は尾びれの形や模様による個体識別が可能なので、今回は撮影できなかったが、写真撮影しておくことによって当海域に来遊する個体の出自が明らかになることが期待される。

#### ⑤シャチ

9月に約15頭が観察された。記録上2群としたが、これはおそらく広範囲に分散した同一の群れである。距離や光線条件が悪く、十分な写真撮影ができなかったこともあり、詳細な群構成や個体間の関係は不明であるが、2km四方くらいの海域の外側に大型のオス成獣が少なくとも2頭おり、その内側に2～5頭程度の小群が数個あり、この中には親子やメス、若齢獣と思われる個体も含んでいた。5頭程度が調査船のすぐ舳先に現れ、スパイホップとテールスラップそれぞれ1回を示したが、こちらが停船しなかったためか、根室海峡で見られるような船周辺での遊びや執拗な偵察のような行動は観察されなかった。なお、この時、近くにミンククジラ1頭の浮上を確認しており、シャチの群れはこれをハンティングしていたか、付きまとしてその機会を伺っていた可能性がある。

本種は近年、根室海峡では春から初夏、釧路沖では秋を中心に定期的に確認されており、北方四島でも観察されていることから道東を広範囲に移動しているのかもしれない。霧多布海域へも定常的に出現している可能性がある。個体の移動や行動を明らかにするためにも、本種が出現した時は走行を一時中止して群構成の把握や個体識別用写真の撮影を行なうべきであろう。

#### ⑥カマイルカ

7～10月に毎月観察された。多くは数～10頭程度の小群だったが、7月には約100頭の大群が、厚岸方向から根室方向へ移動してゆくの観察された。2010年の沿岸調査では6月と9月に確認されており、近隣海域での観察も合わせると、道東太平洋には6～11月前後に来遊するものと推察される。本種はカタクチイワシ等表層性魚類の群れを追っていると思われ、群れと一緒にミズナギドリ類がしばしば一緒に観察される。また、船に付く習

性があり、9月調査では2頭がすぐ舳先で船首波に乗って泳ぐのが観察された。

#### ⑦ネズミイルカ

6～8、10月に1～5頭が観察された。本種は基本的に沿岸性であり、岸から見える範囲でも普通に観察されることから、本調査での少ない出現は、調査範囲が主に沖合であったためと思われる。また、11～2月には確認されなかったが、少なくとも十勝沿岸では冬期にも普通であり、同時期に霧多布海域に本種がいるかは沿岸や海岸からの観察結果も合わせて判断する必要がある。特に冬期は好天でも海面には波があることが多く、背ビレが小さく、飛沫等も出ない本種の発見は困難と思われる。

#### ⑧イシイルカ

7月に2群6頭、11月に1群約20頭が確認された。前者はゆっくりとした潜水と浮上を繰り返し、採餌中と思われた。後者は海上を移動中で、「ルースターテイル（おんどりの尾）」と呼ばれる高い水飛沫が観察された。本種にはイシイルカ型イシイルカ（dalli-type）とリクゼンイルカ型イシイルカ（truei-type）の2型があるが、腹部が見えなかったため、本調査で記録されたのがどちらのタイプなのかは不明である。本種は2010年の沿岸調査では未確認であり、ネズミイルカやカマイルカと比べて外洋性であると推察される。霧多布海域での現状や季節性を議論するには、今後のデータの集積が必要である。

表4 調査日ごとの海獣類の種別確認数

No.	科名	種名/月・日	5	6	7	8	9	10	11	1	2
			24	13	27	20	20	5	18	18	23
1	アシカ	キタオットセイ		4	3						
2	アザラシ	ゼニガタアザラシ	25		16	6		17			
3	ナガスクジラ	ミンククジラ					2/2				
4		ザトウクジラ					1/1				
5	マイルカ	シャチ					2/15				
6		カマイルカ			2/110	1/10	2/10	1/3			
7	ネズミイルカ	ネズミイルカ		1/1	4/8	1/1		1/5			
8		イシイルカ			2/6				1/20		
9		ミンククジラ?	1/1								
10		イルカ類		1/1		1/3					
11		不明鯨類					1/1				
			鯨類の数は/の左が群数、右が個体数を表す								